

20年近く前の春5月、北極海の北緯70度に位置するビクトリア島(カナダの北西州)へ北極野牛(マスクオックス)を撮りに行きました。当時は成田からバンクーバーへの航空便が有り、私はバンクーバーで小型のローカル機に乗り換えて小さな空港が有るビクトリア島のケンブリッジベイに降り立ちました。

そこは未だ一面雪に覆われたひっそりした集落でした。私は出迎えてくれたイヌイットのガイドと一緒に直ぐに装備や食料を調達して回りましたが、道路脇の彼方此方に凍りついた北極野牛の頭が転がっているのを見掛けて驚きました。

ここではイヌイットが北極野牛を食用にするために時々ハンティングしているからでした。(当時イヌイットには白熊ハンティングの権利も割り当てられていて、その権利をお金持ちが買ってスポーツハンティングする事も有りました。)

そんな事から北極野牛は用心深くて直ぐ逃げます。特に春は新しく生まれた仔牛が居るのでなおさらです。それに辺り一面見渡せる雪原で、大きなカメラも担いでいるため、隠れて近づく事も出来ません。そこでイヌイットのガイドは、スノーモービルで橇を引きながら北極野牛を追い回し、疲れた所で近づく作戦を取りました。橇には機関砲のように三脚にセットした大口径の望遠レンズ付き6×7版カメラと私が乗りました(北極野牛にして見ればさぞかし怖かったらうと思います)。

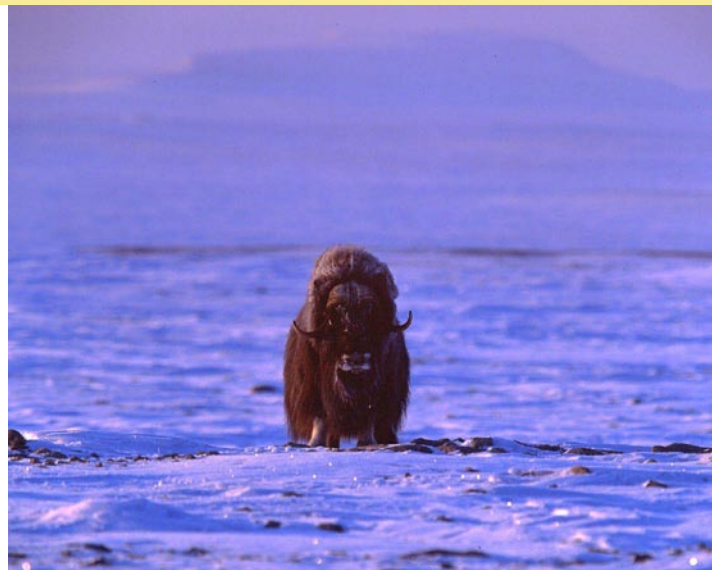
イヌイットのガイドと私は殆ど白夜の40km×60km四方の雪原を走り回りました。そして適当な北極野牛の群れを見つける度に、心苦しく思いながらも'傷付けないから我慢してくれ'と言い訳しながら雪原の暴走族になって北極野牛を追い掛け撮影しました。

3日目の午後、春に新しく生まれた仔牛が何頭も居る大きな群れを追い掛けながら撮影した時でした。仔牛は直ぐに走れなくなって雪原に立ち尽くし、心臓マヒでも起こしそうにゼイゼイ呼吸しながら、親と見まがう程の強面で我々を睨み付けました。

親を怒らせないように、そんな仔牛には近づかず更に親を追ってスノーモービルを走らせた時、橇が吹き溜まりに



北極海を渡って来た強い風が高低差の少ない島を吹き抜ける。
この風が雪を吹き飛ばすので、少し掘り起こすだけで短い夏に育った草が顔を出す。
この草を求めて北極野牛は凍結した平原を放浪する。



なった雪の斜面を曲がり切れずにひっくり返ってしまいました。そして私はカメラと一緒に雪の中へ放り出され、雪の中で息が出来ずにもがきながらやっとの思いで這い出しました。幸い大した怪我は無く軽い打撲と擦り傷程度でした。しかし大口径の望遠レンズが割れていました! 天罰観面? でした(;_;)。

●すでに掲載された「写真便り」はこちらにあります
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/ookawasan/essey-title.html>

●大川さんのホームページはこちら
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
<http://kawamoto1940.web.fc2.com/>
<http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvally.htm>